

祝 辞

少林寺拳法グループ
総 裁 宗 由 貴



金剛禅総本山少林寺座間道院設立 30 周年記念、誠におめでとうございます。1976 年 10 月に座間道院が設立され、今年で 30 周年を迎えられましたことは、藤野祐彰道院長を中心とする拳士の皆様が、様々な困難を乗り越え、少林寺拳法の発展に、情熱を持って取り組み、地道な活動を続けてこられた証しであると思います。

地域に根ざした青少年育成活動を続けてこられた藤野道院長と拳士の皆様に、深く敬意を表しますと共に、ご支援ご協力を頂きました地域の皆様方に、心からお礼を申し上げます。

「Shorinjikempo(少林寺拳法)」は、1947 年、少林寺拳法初代師家宗道臣(開祖)によって「自己確立」と「自他共楽」を基本理念に、世の中に役立つ青少年育成も目的として創始されました。この基本理念に添って活動を推進するために、金剛禅総本山少林寺、少林寺拳法連盟、専門学校禅林学園、少林寺拳法世界連合、SHORINJI KENPO UNITY の 5 つの団体が組織され発展し、現在では世界 32 ヶ国に広がりを見せています。

来年、「Shorinjikempo(少林寺拳法)」は創始 60 周年を迎えます。少林寺拳法グループでは、統一マーク・ロゴを旗頭に、社会教育団体として価値を高め、「教え」と「技法」と「教育システム」を兼ね備えた「Shorinjikempo(少林寺拳法)」が社会に役立つ人づくりの団体であることを、これまで以上にアピールしてまいります。

少子高齢化の加速や、凶悪な犯罪の増加など、社会問題が深刻化する現代、今こそ「Shorinjikempo(少林寺拳法)」と社会との連携によって人づくりすることの価値は高いはずです。開祖が少林寺拳法を創始した当時、座間道院が設立された 30 年前、そして現在とでは、時代背景も社会状況も異なります。しかし少林寺拳法を通して社会に貢献できる人材育成をするという目的は同じです。今後もますます邁進され、35 周年、40 周年を目指し、さらに素晴らしい歴史を積み重ねていかれますことを期待しております。

最後に、これまで座間道院の活動を通して少林寺拳法にご理解を頂き、支えて下さいました保護者ならびに後援者の皆様方に、重ねてお礼申し上げます。

合 掌



祝 辞

金剛禪総本山少林寺
代表 鈴木 義孝

金剛禪総本山少林寺座間道院が設立30周年を迎えられますことを、心よりお慶び申し上げますとともに、藤野祐彰道院長のたゆまぬご尽力に心より敬意を表します。

金剛禪は、初代師家・宗道臣(開祖)により開基されました。

開祖は自身の戦争体験から、真に平和で豊かな社会を築くためには、自信・勇気・行動力・慈悲心に満ち溢れた人間を育成する以外にはないと悟られました。

爾来、金剛禪は一貫して、少林寺拳法を通じて“半分は他人の幸せを考えることのできる人間”の育成を目的として活動しております。

戦後60年を経た今の社会を見るにつけても、“人の質”の重要性を再認識させられる出来事が毎日のように世間を騒がせています。

このような世の中において私たちががなすべきことは、人は皆、生かされて生きていることを実感し、一人一人が人間の尊厳を慮り、共に手を取りあって一歩ずつ社会を良くしようと行動していくことに他なりません。

少林寺拳法は昨年、世界32ヶ国に広がる絆をさらに深め、“世界で一つの少林寺拳法”を表すために「統一マーク・ロゴ」を制定いたしました。少林寺拳法はこの統一マーク・ロゴのもと、社会に役立つ人づくりにますます邁進する所存です。

拳士各位には、金剛禪の原点である“人づくりによる国づくり”を説かれた開祖の志に立ち返り、これからも座間道院のより一層の発展に努められることを心よりご期待もうしあげます。

また、関係者各位には、今後とも金剛禪の活動にご理解とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます、祝辞といたします。

合 掌

祝 辞

財団法人 少林寺拳法連盟
会長 新井 庸弘



この度、座間支部が設立30周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

永年にわたり座間支部の運営に尽力された藤野祐彰支部長をはじめとする拳士各位に敬意を表しますとともに、関係各位のご支援に対して心よりお礼申し上げます。

少林寺拳法は、1947年、少林寺拳法 初代師家 宗道臣（1911～1980）によって創始され、「半ばは自己の^{わがみ}幸せを、半ばは他人の^{ひと}幸せを」の基本理念のもとに人づくりの「行」として広く社会に普及してまいりました。日本で発祥した少林寺拳法は、国内2900支部・世界32カ国へと広がり、昨年「世界で一つの少林寺拳法」を表す統一マーク・ロゴを制定し、社会教育団体としての活動を展開しております。最近の社会を見ると、安全であるはずの教育現場や家庭においてさえ尊い命が奪われる事件が相次いでおります。あるいは、いじめや生きることに意義を見出せず自ら命を絶ってしまう悲劇も後を絶ちません。人間としての生き方の規範が失われ、倫理観の低下が著しく、混沌とした時代となってしまっています。しかしながら、そのような時代であるからこそ人間の在り方・生き方を説く少林寺拳法の必要性はますます高まっております。2007年、少林寺拳法は創始60周年を迎えます。「人づくりによる国づくり」を目指した宗道臣 初代師家の志を受け継ぎ、少林寺拳法連盟では「現代社会に役立つ人づくり」に力を注いでまいります。拳士の皆様におかれましては、少林寺拳法創始60周年を目前に控えた今、何のために少林寺拳法を修行するのか、もう一度自らに問うてみようではありませんか。少林寺拳法は道場において学んだものを地域社会や家庭、職場や学校で実践してこそ意味があります。物心ともに豊かな平和社会実現のために、ともに行動してまいりましょう。最後になりましたが、設立30周年を契機とした座間支部のますますのご発展をお祈りいたしますとともに、関係各位のより一層のご協力をお願いいたしまして祝辞といたします。

合 掌



人は変わる。

専門学校林学園
校長 山崎 博通

「学ぶために地球に送られてきたわたしたちが、学びのテストに合格したとき、卒業がゆるされる。

未来の蝶をつつんでいるさなぎのように、たましいを閉じこめている肉体をぬぎ捨てるのがゆるされ、ときがくると、わたしたちはたましいを解き放つ」

—人生は廻る輪のように—

(エリザベス・キューブラー・ロス著)

このさなぎと蝶のたとえのように、人は劇的に変われます。

私も四十過ぎからこの二十年間、ただ“技”を変えろという出発から、本当に“人生”も変わるんだ。ということを実感しています。

その源動力は、『魂』です。

—我らは、魂をダーマよりうけ、身体を父母よりうけたることを感謝し、
報恩の誠をつくさんことを期す—

拳士信条の第一です。開祖は、よくぞこの言葉を残して下さった。

本当に、今、その恵みを実感しています。

座間道院三十周年記念事業に、お招き頂いた私の使命は、これ。ただ、このことをお伝えすることだと思っています。

人は変わる。

開祖に、第二世師家に、共につづきましょう。

座間道院設立30周年に寄せて

川越道院 道院長 矢島 隆夫



合掌、この度は、座間道院設立30周年を迎えられ誠にありがとうございます。町田道院を中心に東京都下、神奈川県（小田急線沿線）に広がった少林寺拳法を行ずる道院、支部の先がけとして座間の地に開かれたのが藤野祐彰道院長でありました。

当時、学生にもかかわらず道院を設立し、門下生の教育に強い信念と情熱を持って邁進されて30年、藤野道院長を中心として、道院長を支え、道のすばらしさを信じ歩んでこられた幹部の方々の精進・努力の賜であると確信しております。

この少林寺拳法の道は、深く、高く、そして広く、学び尽せぬところがあります。どうぞ、この30周年を機に藤野道院長をはじめ拳士の皆様が、もう一度あの道院設立当時の初心に還って、不惜身命、大勇猛心を決定されて修行に益々勉勵されます様祈念しております。今後の益々の発展と皆様方の更なる活躍を願っております。
結手

座間道院設立30周年記念おめでとうございます

埼玉県少林寺拳法連盟 副理事長
埼玉鶴瀬支部長 大野木 憲三



藤野先生始め拳士の皆様、関係者の皆様に心よりお祝い申し上げます。

私自身、藤野先生の豪快でバイタリティ溢れる人柄に魅かれて30数年来のお付き合いをさせて頂いて来ました。

少林寺拳法は来年創始60周年を迎えますが30年もの間当地に於いて金剛禅運動の布教と少林寺拳法の普及に務め、多くの人材を育成されたことに深く敬意を表すとともに今後ますますの御発展を祈念致しましてお祝いの言葉とさせて戴きます。

合掌



座間支部30周年に寄せて

町田市少林寺拳法協会会長 岡部 哲治

少林寺拳法は、国内はもとより海外各地にも支部ができ、国際的な規模で発展している。そして、2007年には60周年をみることになるという。この伝統を開いた開祖は、残念ながらこの展開をご覧になることはおできになれないが、きっと喜んでいらっしゃると思われる。

座間支部は、少林寺拳法・町田支部が山崎博通氏によって開かれたところから生まれてきたものである。昭和40年に山崎先生が玉川大学の監督として町田に関わりを持つようになってから、大学支部だけではなく一般の人も修行できる道院をこの地区に開くことが自分の使命だと考えて行動を起こした。始めるためには、まず練習場を確保しなければならない。当時、町田市会議員であった河合秀次郎氏の助力によって町田一中の体育館が借りられることになり、少林寺拳法町田道院が発足したのであった。その初期の時代に入門したのが当時中学生であった藤野祐彰氏である。山崎先生は開祖直伝の少林寺拳法を広めるのに努力し、町田市内および近隣の諸市にいくつかの少林寺拳法の道場が設立された。座間支部もそういう経緯で出発したのであった。

私は玉川大学に勤め始めた昭和40年、大学1年生であった矢島隆夫氏に拳法部設立に担ぎ出され、それが縁で大学はもちろん町田道院、町田協会に深い関係を持つに至った。初めは適当に付き合っただけでやめるつもりでいたが、玉川大学拳法部員はじめ各支部の拳士諸氏がどんどん成長していく様子を見ていくと引き下がる時期を逸し今日に至っている。その中で藤野氏が町田道院から自分の支部を立ち上げ、30年を迎えるというのはまことに意義深いことである。

少林寺拳法は単に技を鍛えるだけでなく、人を育てるという意味で非常に優れた行である。もちろんどんなスポーツ、武道でも、一芸に達した人々はそれなりに人間的な成長が見られるが、少林寺も修業の積み重ねによって得られたものは人間に厚みを与えているように思える。藤野氏も含め支部を立ち上げた人々が、良い弟子や仲間を育て世の中に大きな貢献をしている例は枚挙にいとまがない。

これからも少林寺拳法を通じて人々に幸せを与え、われわれの住む日本を一層豊かで住みやすい国にしてゆく運動を続けることを、30周年を迎えた記念に誓いあいたいものである。

座間支部長藤野祐彰氏が本年初頭から難病にかかり大変心配したが、どうやら幸運にもそれを克服できたようなので、以前と同様に元気で座間支部の発展に寄与され、40周年、50周年を迎えることを心から願っている。

座間道院設立30周年に寄せて

高津道院 道院長 佐名木 修



合掌 座間道院を開設以来、多くの拳士を立派に感化育成してこられた藤野祐彰先生はじめ、座間道院をサポートしてこられた法縁有志のみなさま、そして修行に励んでおられる拳士各位に心からお祝辞を申し上げます。

藤野先生とはよく演武を組みました。藤野先生は綺麗に澄みきった心で、ピタリと照準をあわせたような間合いから、遠慮のない鋭い突き蹴りをテンポよく繰り出されたものです。当事者にだけわかり合える独特の緊張感を共有しながら「術技もまた、よく錬られた人柄の現れなのだ」と感じさせてくれたことを覚えています。

藤野先生は開祖の薫陶を受けられ、山崎博通先生、矢島隆夫先生そして岩田空也先生はじめ素晴らしい指導者に恵まれて、座間道院長として立派に人望を博しています。

これからは、ご健康に充分留意されますとともに、「師の心」を心として、更にご精進されますように祈念申し上げます。

再拝

座間道院30周年おめでとうございます

東京成瀬道院 道院長 菅野 明洋



座間道院30周年おめでとうございます。過ぎてしまえば、30年など、あっという間です。私も、延岡東道院で3年間、現在の東京成瀬道院で27年合わせると調度30年と言う事になります。私は、27歳からでしたが、藤野先生は、21歳位から道院長をされたと思います。人生は、知識×経験＝智慧となるようです。

少林寺拳法も技法を式に当てはめて見ますと、技×練習量＝少林寺拳法となり、益々本質に近づける様です。少林寺拳法の本質を、自分自身を通じて、周りに伝える事をお互いに頑張りましょう。30周年を、新たな出発点として、更なる進化をご期待申し上げます。

座間支部設立 30 周年おめでとうございます

神奈川大和道院 道院長 荒木 誠吉



座間支部設立 30 周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

当神奈川大和道院も貴道院と同様に設立 30 周年を迎えることが出来ました。思いおこせば 30 年前本山での道院設立の講習会受講の際、本部で藤野先生とお会いし、共に管長先生(開祖)の前で道院長として、また金剛禅運動の指導者となるべく誓いをたてたことが昨日のように思い出されます。

藤野先生は 20 歳という若さで道院長となられ、設立当初は大変なご苦勞があったことと思います。

しかしこの 30 年間、藤野先生の少林寺拳法に対する熱い熱い情熱と、それに応えられた門下生の方々がおられ、先生と一丸となって修行された結晶が今日の座間道院を作られたものと思います。開祖は、正義感と行動力また他人を思いやる慈悲心を持った青少年を一人でも多くつくるのがこの世の中を良くしていく、つまり人造りが国造りの大道であることを説かれました。

まさにその教えを実践された藤野先生の生き様に共鳴した多くの拳士が座間道院に集い、素晴らしい縁を築かれておられます。

当道院も座間道院からのお誘いで、夏は相模川河川敷でのバーベキュー、小教区での合同練習などに参加させて頂いた時など、てきぱきとした道院幹部や拳士の方々の動き、他道院である私たちに接する態度の良さにいつも感心させられております。

藤野先生は開祖の教えを忠実に守り実行され、伝承され私どもの模範とするところであります。

今後も益々ご精進されまして金剛禅運動の一牽引者としてご指導頂けますようお願いし、座間道院のご発展をお祈り致します。

少林寺拳法座間支部 30 周年記念に寄せて

元町田道院門下生 森川浩志郎



合掌

開祖宗道臣先生が成人ばかりでなくこれからは、大学生・高校生・或いは中学生の中から将来の少林寺の指導者・社会の指導者を育てなければいけない、とよく言われておりました。

思い起こせば、36年～37年前に丁度その年代（中学？高校生）に当たり日々ストリート・ファイトに明け暮れていた一人の若者（少年）が、当時の山崎先生（現武専校長）率いる町田道院に入門し山崎門下生となり、愛情に満ち溢れた厳しい過酷な？修行に耐え、奇しくも開祖の思惑通り？若くして人を指導する立場になり（教えることは、教えられることでもありますが）それから又30年の長い月日が流れ、その間幾多の艱難辛苦を乗り越え、今又廻りの良き理解者にも恵まれ未来に向かって突き進んで居るそれが今日の座間支部30周年を迎えられた藤野支部長誕生の経緯であり現在であります。

藤野先生並びに座間支部拳士の皆様、また関係者の皆様心より30周年おめでとう御座います。これからは、お体に留意され、己にも厳しく切磋琢磨され世相を見据えて、40歳にして惑わずの格言？がありますが、40歳前の迷える親御さん、またその人達の若い幼い子供さん達のいじめ・自殺・また大学生の度重なる不祥事、これら無くし開祖の唱えた理想郷の建設に現状に見合った指導方針を（物欲が満たされ？生きる目的・目標・希望を失っているようにも思える世相に合致した指導方針）確立されて自他共に精進されます様期待しております。益々の頑張りを祈念しております。

結手

座間道院創立30周年を祝う

東海大学少林寺拳法部 部長教員 日當 喜澄

合掌、座間道院創立30周年記念おめでとうございます。私が、座間道院といったら、青春いっぱい藤野道院長かそれを取り巻く幹部並びにそれを管理・監督されている道院長のお母さんや長老格の須長さん！そして、当時女子高校生でかわいかった藤野先生の奥さんしか知りません。連れて行かれた店としては、明月館の焼き肉屋や名前を忘れましたが鳥専門店などです。さがみ野の温泉湯にも行ったかな！

いずれにしても、少林寺拳法の開祖「宗 道臣」先生に導かれた藤野先生は、新進気鋭はつらつと少林寺拳法にのめり込み、青少年育成活動に邁進されておりまして、30年の地域活動の歴史を刻まれました。お聞きすると500名の拳士が道院の門をたたかれ全国各地におられるとのこと。破天荒な藤野先生より伝授された拳士は、思想と行動力を遺憾なく発揮して、様々な分野に活躍されておられることでしょう。

今、日本に東洋文化としての優しさや労りの側面が、薄れてきたような行為・言動が数多くみられます。開祖は、ダーマ思想を等して、私達に人間として尊厳を促し、理想郷建設の同志として呼びかけ続けられました。藤野先生に於かれましては、御身大事を一番として、マイペースで今後とも、少林寺拳法の指導とお仕事にご活躍されることをご祈念申し上げます。 結手

厚木道院 <http://www005.upp.so-net.ne.jp/nurselog/atugi/>

座間道院創立30周年に寄せて

森繁エンタープライズ社長 森繁 建

この度は「開院三十周年」誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

一言で三十年と云いまして、この間様々なご苦勞もあり、脳裏に胸に去来する事多々あると思います。

いつの間にか世の中は物質的な事が優先される、殺伐とした何とも悲しい時代となってしまうまい。此処まで来てしまうと、抗し切れず流されてしまう感に陥りそうですが、このような時にこそ、人間の基本としての心身を鍛える貴院の様な存在が望まれるのです。

厳しい環境にあるかと思いますが、一人でも多くの真っ直ぐな人間を世に送り出してください。一般には「健全な身体に健全な精神が宿る」と云いますが、「健全な身体と健全な精神」が正しく、両者は一体のものだと、物の本に書いてありました。これから先「四十周年、五十周年を目指して」と云いたいところですが、敢えて明日から又一日一日と日々を重ねてください。

貴兄等の志が正しく受け継がれて行き、ふと気が付けば「百周年」となっている事を確信しています。おめでとうございます。いつか立派になった貴兄にお目にかかる日を楽しみにしています。

末文になり失礼ですが、母上様にいつまでもお元気でお過ごし下さる様、そして私も93歳の父と楽しくしておりますとお伝え下さい。

座間道院設立30周年 お祝い

町田道院 道院長 道下 英裕



座間道院設立30周年という事は、藤野先生が道院長になって早30年ですね、早いものです。私が矢島先生の後を受けて町田道院の道院長になったのが、藤野先生が道院長になる数ヶ月前のことでしたので、同じ時代に一緒に道院長を経験した事になります。

町田で一緒に修行していた頃がとても懐かしく思い出されます。当時藤野先生が高校生、私は大学生でした。当時の仲間は練習が好きで、夜中の駐車場、学校のグラウンド、仲間の自宅そばの道路などを練習場としていました。もちろん近隣道院にも練習に出かけ特に厚木道院にはしばしば出かけていました。

藤野先生は当時から同輩、後輩を集めていつも遊んでいました。

縁を作り、活かし、維持することを自然に出来ることは、一つの才能でしょう。柳生家の家訓に「小才は縁に出会って 縁に気づかず。中才は縁に気づいて、縁を生かさず。大才は、袖すり会（お）うた縁をも生かす」があります。縁を活かし少林寺拳法を広めていくのは我々拳士の目指すものの一つです。

座間道院の恒例行事がいくつかあり毎年同じ時期に、同じ場所で、同じようなメンバーで開催しています。その内の一つの「河口湖の合宿」には私も毎年参加させてもらっています。縁を維持する、継続は力なりのいい見本です。

これからもいい仲間をつくり、良い縁を活かして、座間道院がさらに発展することを、楽しみにしています。

座間道院30周年にあたり

各務原東道院 道院長 青山 昌伸



この度、金剛禅総本山少林寺座間道院が、満30周年を迎えにあたり、藤野道院長をはじめ、道院に集う拳士の絆の強さを感じるものです。少林寺拳法創設当時に比べ、現代は物質的には比較にならぬくらい豊かになっていますが人心は、必ずしも向上しているとは言えず、むしろ豊かさのなかで、時代の変化に対応できず、自分を見失い、あるいは独善的な行為に走る人が増えているのが現実であります。

こうした時代にあって、頼り得る自己の確立と苦楽を分かち合うことを基本理念とする少林寺拳法こそ、最も時代の要請に応えた武道であり修行法であると確信しています。拳士一人一人が、初心に帰り又開祖のおもいに心をとめ、しっかり修練を積むことにより健康で人間性豊かな人になるとともに、住みよい社会を築くことにつながることを確信しています。

こうしたよりよい社会や仲間を築くための、第一歩は、やはり、道院一つ一つの活動であり、その道院運営を長きにわたり続けなければ、理想への道はないと考えます。さいわいにして、金剛禅総本山少林寺座間道院は、その活動をたえまなく続けてきたゆえ拳士一人一人の絆が広がり又その絆が和となって、さらなる広くて大きな和に広まろうとしていることは大変うれしく思うものです。どうか今後とも、一人一人の力を合わせて、多くの人たちと共鳴・共感できる社会を築くために進んで下さいますようお願い申し上げます。

最後に、藤野先生をはじめ道院拳士の日頃の少林寺拳法の熱意とご尽力に敬意を表します。



お 祝 い の 言 葉

群馬前橋支部 支部長 江原 謙治



座間支部30周年、おめでとうございます。藤野先生、ならびに拳士の皆様には心よりお祝いを申し上げます。藤野先生って、一言でいえば「波乱万丈が服を着て歩いている」… そんな表現がピッタリの方だと思います。

あの開設式からもう30年もたってしまったんですね。

皆さんは御存知でしょうか。座間支部ホームページの「開設式」の写真の中に私がいるのを。座間支部が設立された1976年、私は和光大学少林寺拳法部の学生（3年）でした。藤野先生も当時は東京農大在学中（4年）でしたが、矢島先生よりバトンを受けて我々の監督をしてくださっておりました。主将だった私は、技の指導をしていただくときなどよく相手をさせられました。

「この先生、サディストかも知れない…」当時の率直な気持ちでした。でも普段は面倒見がよくやさしかったです。そして、強かった。酒の席では「番外編の法話」などよく聞かせていただきました。

あの頃は藤野先生も私も本当に若かったです。能條さん、兵頭さんもかわいかったです（笑）。道下先生は若い頃から少し老けて見えましたが（失礼）。当時は30年後のことなんて想像すらしませんでした。20代前半の若くてバリバリの頃です。自分が歳をとった姿など考えられませんでした。自分の若さが永遠に続くような錯覚さえしていたのかもしれませんが。いつの間にか皆さん、歳をとりましたね。でも、30年後の今でも少林寺拳法で結ばれている。素晴らしいことです。

私自身当時を思うと、まさか支部長としてこのたびの「座間支部30周年」に立ち合わせていただくなんて考えもしませんでした。

藤野先生との出会いがなければ、少林寺拳法の指導者としての今の私は存在しません。先生には今後も元気に御活躍いただき、愛すべき拳士の皆様とともに、さらなる発展を目指していただきたいと思います。

続 け ら れ る 幸 せ

泉川道院（愛媛県新居浜市）道院長 158期 酒村 幸男

道院設立30周年本当におめでとうございます。これまで続けて来られました藤野先生のご尽力に心から敬意を表しますと共に先生と共に少林寺拳法を育ててくださった幹部の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

藤野先生は20歳代で道院を任されたと聞いております、私も20歳代で会社の拳法部を初段で任せ少林寺拳法を十分わからないままに昭和38年から全国指導者講習会に参加しました。今日のような錬成道場のない時代でしたので小学校、中学校の体育館を借りて宗道臣（開祖）先生の話は昼も夜も3日にわたり聞いてきました。

昨年昇段試験の時、口述試験で奥さんは私に理解、協力して下さいますかとの質問がありました。なぜ？ 皆さんカミサン、家族の協力理解なくして拳法続けられませんよね、少林寺拳法を愛しそして奥さん、彼氏、彼女、家族の理解があればこそ続けられるのではありませんか、いやそれ以上に自分の意志、健康力と共に仲間がいる喜びを感じられるからこそ道院へ足を向けているのではありません？

拳法を続けられること、このことは私を始め皆さんにとっても最高の幸せではありませんでしょうか、続けましよう体の続く限り大人も子供も開祖が念じていた合掌礼で皆が幸せになれる世界に行きましょう。



30周年に寄せて

西湘飛龍道院 道院長 遠藤 庫平



座間道院設立30周年記念おめでとうございます。

開祖宗道臣先生は、60年前に少林寺拳法の道場を建てられ「人、人、人、すべては人の質にある。」と説かれました。

現代社会では、人間性を問われる事柄があまりにも多すぎます。

まさに現代社会のこのような有り様を差していたのではないのでしょうか、どんな社会でも、どんな世の中でも人間性は問われます。少林寺拳法を私は、ライフワークとして、取り組んでいます。

座間道院の今後の御発展をお祈りしております。

御 祝

千葉海匝支部道場 支部長 伊東 茂治



合掌

座間道院30周年おめでとうございます。私が藤野祐彰先生のご指導を受けるきっかけとなったのは桜美林大学少林寺拳法部に在籍し、部活存続の危うい時期に監督を引き受けていただいたことからでした。当時は相州共和道院が大学の近くにあり、部活終了後に練習に参加させていただきました。実は少林寺拳法の練習より藤野先生のご自宅にいた時間の方が長かったように思います。少林寺拳法の技術のすばらしさはもちろんのこと、私たちのようなツツパリの大学生の気持ちも良く理解してくれた藤野先生の人間性に親近感を持っておりました。深夜遅くまで毎日のように人が集まり、朝早く仕事に行くという先生の体力・気力は「すごい」の一言でした。

私も藤野先生を目標として、道場を運営し20年になりますが、仕事との両立や体調を崩されたりと並々ならぬ苦労があったものと思われま。これから35周年・40周年と座間道院の益々のご発展と、藤野先生のご健勝を心よりお祈りいたします。

結手



30周年に寄せて

新潟共和道院 顧問（初代支部長）
日本歯科大学新潟生命歯学部少林寺拳法部
監督 池藤 仁市

今も憧れつづけているのは、藤野祐彰道院長と座間道院です。当時、全国で最年少の21歳の道院長としてスタートした当時、ひばりヶ丘児童館での練習をお手伝いをさせていただきました。私と同じ学年ですが、少林寺拳法のセンス(技法)と生活センス(遊び、ファッション等)が最高(ピカイチ!)であり、それを追いかけてつづけ…現在に至っています。私が支部長となったのは、座間道院開設の10年後でした。藤野道院長とは少林寺拳法の修練と日々の生活など、一緒の時間がとても長く!、毎日の・い・ろ・い・ろ・な・出来事の中(私は大学に行かないで…)で、ものの見方と価値観、生き方と絆について学んだのだ…と思います。(10年後、20年後、そして30年後の52歳になった今、正に実感しています。)

藤野道院長との出会いが、私を大きくしてくれました。(体重は、関係ありません…)

昭和49(1974)年4月の東海大学文学部入学とともに、交通の要所である東京都町田市にアパートを決定しました。これが『縁』のはじまりでした。町田道院を初めて知り、初段で転籍しました。そこには、助教の藤野先生が輝いていたのです。当時は矢島隆夫道院長であり、更に佐名木・日當・道下先生方はじめ幹部の方々は雲の上の存在でした。その年の忘年会で、あの…「こんにやく事件!」を(内容を知っている方にお尋ねください…)きっかけに、藤野道院長や多くの先輩と後輩に声をかけていただくことになったのです。そして、町田道院の憧れの助教となるまで、楽しい4年間を過ごし、四段を取得し新潟に帰り、現在に至っています。支部長として、また監督としての指導方法と戦略は、その当時の藤野道院長のノウハウそのままです。『新潟共和』の支部名の『…共和』をいただきました…藤野道院長は、当時、相模原市の共和中学校で「相州共和道院」も設立し活動していました。その「共に和して…」の共和を、ジャックダニエル1本でいただきました。現在、新潟県燕市で活動していますが、世界でただ一つの大切な“支部名”です。

今…、私があるのは…

新潟県の小学校教員として採用され、また初代支部長として、監督として今あるのは藤野道院長と過ごした“青春の4年間”のおかげです。藤野道院長はじめ座間道院から学んだ少林寺拳法の三感(感謝・感激・感動)と四熱(熱血・熱中・情熱・熱意)を、当時のことと比べながら実践できるように、日々大切にしています。なお、新潟の田舎から上京した私に、家族同様にいつも声をかけてごちそうしてくれた“昌子お母さん”。八十八歳のお祝いいただいた色紙の『仁・義・忠・孝・禮』のとおり、今を大切にしています。中国の諺に「飲水思源」があります。それは「水を飲む際には、井戸を掘った人のことを忘れてはいけない…」ということです。藤野道院長と皆様、座間道院から学んだことを忘れずに、そして一歩でも近づけるよう、「日々一新」で努力したいと思います。藤野道院長中心に、皆様の心を一枚岩にして『進化・深化・新化する座間道院』の記憶と記録を創りつづけてください。藤野祐彰道院長はじめ皆様、座間道院のますますのご発展とご活躍を、新潟の地からお祈り申し上げます。次に来る…“35周年記念”を、楽しみにしています。

三方よしと仁義礼知信

京都京極道院 道院長 峠 徹



戦後60年を顧みて、今ほど社会が乱れている時はない。いつの時代にも凶悪事件はあったが、社会全体が廃れきっていると思えるのは、今をおいてないだろう。よく弱肉強食の修羅場だった戦後の荒廃と比較されるが、それはいつの時代でもいる悪人のしわざであって、隣人同士が少ない食べ物を分けあったり、小学校の高学年が低学年を守ったりする倫理感までは、決して失われてはいなかった。

筆者は社会をリタイヤして数年になる。中小企業ではあったが、企業内で少林寺拳法部を作り、高度成長下にあつて企業倫理のあり方に警鐘を鳴らし、正しい商取引を推進すべく金剛禅運動を展開してきた。残念乍ら不徳の致すところで悔恨を残して終わつてが、今もその無念さが尾を引いている為か、実業界、官公庁界の後を断たない不祥事には、ことさらに義憤を覚えるのである。

質の時代の到来を期待して始まった21世紀は未だ日が浅いのに、すでに世紀末的な様相を呈しているのは、よほど人の質が低下しているのであろう。

企業には立派な社是や社訓がある。たいていその内容は、会社と社員と社会の三者相互の繁栄を謳っている。現在の日本経済は、敗戦ですべてが灰燼に帰した時に始まるが、当時の経済は、社会で必要な物を考え作ることが経営者と社員の喜びであり、それを買ってくれる消費者の喜びや、社会を暮らし易くする公益が、会社と社員に還元される利益だ、としたものだ。物も無く、不便な時代だから、求められるものを提供することがそのまま商売になる単純な経済活動ではあったが、社会の為になることが、会社の為になることであり、社員の為になることである、会社の為になることは社会の為になることであり、社員の為なることである、社員の為になることは会社の為になることであり、社会の為になることである、という、三者がすべて潤う企業倫理が、商いの基本であつたからこそ、かの敗戦から驚異的な復興をなしとげ得たのである。

ところが高度成長時代に入ってくると、機械化が進み、闇雲に商品が市場に吐き出されるようになった。当然市場の要求の有無にかかわらず出来た商品は売りさばかねばならなくなった。独自の商品より手っ取り早い模倣が優先され、必然的に価格競争と、質とは裏腹の誇大広告が消費者を幻惑した。こうして経営者は企業を大きくすることを第一義とし、市場占有率を高める為には、企業倫理も企業責任もあつたものではなかった。社員はその先頭を進んだ。当初はまだ競争であつたが、やがて闘争に変わって行った。競争は、切磋琢磨することで、未だお互いが向上し共存することができたが、闘争が目的となると、相手を淘汰して自分だけが生きようとする事だから、目的の為には手段は選ばなくなるのは当然だった。何が何でも売れ、と誇大広告や意図的に発信され嘘情報は日常的であつた。そしてあげくの果ては、大気河川は汚染し、道路は車であふれ、事故は多発し、人の心はずさんだ。社会は物質的に豊かさを謳歌する代償として、生きる苦しみを払わねばならなくなったはずだが、日本列島すべてが浮かれ酔いしれていて、それに気づく者は少なかった。しかしながら、企業倫理を見失つた経済行為による企業は、しょせん水泡水泡であつた。それがはじけた瞬間、かの権勢を誇つた大企業はたちまち倒産か苦境に陥つたばかりか、日本経済そのものを壊滅させる結果を招いた。国民は、初めて経験する長いデフレ不況に苦し

んだ。ここまで来たら、因果応報という仏教の哲理のもとで、正しい人間としてのあり方に思いを致すべきところなのに、一人の人間が、企業人と自分とを使い分けして、企業の為だ、と良心の呵責を糊塗してきた企業人は、何も学ぶ事が出来ず、相変わらず社会を退嬰化させる主役を演じているのである。心にもなく深深と頭を下げ、薄く禿げかかった頭を衆目に曝す哀れな主役達は、あたかも日替わり定食のように変わるが、最も見たくない姿である。

関西は商売人の発祥の地である。古くは江戸時代から関西の商人には、それを守らなければ決して商いが上手く行かない、ということを経験で悟った商売倫理があって、それは時代が移り、社会が変化しても、常に守られて来た。今の社会を毒している、経済界や官公庁の人間達の、愚かな行為の原因は、その倫理を忘れてしまったか、知らないことにある。しかし少林寺拳法の拳士である限り、いたずらに社会を嘆いてばかりいるのではなく、人間としての正しい経済行為のありかたを学び、周囲はどうあれ、自分はこう生きるのだ、という信念を固め、社会に影響を及ぼす役割を果たさねばならない。最後にこの稿の目的として、金剛禅学習の周辺領域の一つとして学んで頂きたい企業倫理の二例を提供したい。

一つ目は「三方よし」である。近江商人といえば、古くは江戸時代から、滋賀県の近江地方を中心に活躍した人たちのことで、この地方出身の成功した創業者は、皆この地方の商売倫理を経営哲学として来た。その原点は天秤棒に商品をぶらさげて売りに出る商人の姿勢にある。言うまでも無くその商品はその地方の特産品であり、売りに行く先にそれが無くて有り難がられる商品である。しかもそれだけではない。上方の情報もあわせて伝えるのである。顧客はたいそう喜び、次に来るのを楽しみにして待っている。さらにまだある。儲けたお金を持って帰ってしまうのではなく、売上代金でその地方の特産品を仕入れて持ち帰るのである。商人は行きも帰りも儲けがあるばかりでなく、その地方の人は珍しいものが手に入るは、地方の情報は聞けるは、自分のところの商品は買ってくれるはで、売る人も、買う人も、その地域全体も、喜びが得られる、という訳である。さてその三方とは何か。それは、売手に良し、買手に良し、世間良し、であり、中村治兵衛と言う人の思想である。

もう一つは、江戸時代の中期的人で、京都は亀岡の石田梅岩と言う人の教えである。彼の教えは石門心学といわれるが、儒教、仏教、神道の考え方を取り入れ、当時儒教では、独善的な営利活動をする商人が一番蔑まれていたが、その活動を、勤勉、正直、誠実、儉約に改め、それに基づいて商売することで、大いに誇りをもって生きよう、と世間にアピールしたものである。それは儒教の仁・義・礼・知・信の五常で、仁は他人の心を思いやるころであり、義は正義感のころである。礼は相手を敬うころであり、知は知恵を働かせて商品を作るころである。そして最後に信は、この四つのころを実践することで顧客の信用を得よ、という思想である。いたずらに自利を求め、我に執着して苦海をものがくばかりの人たちは、今こそ目を醒まし、天秤棒を担いだ昔の商人にその教えを乞わねばならないのではないか。人間は無明なるが故に一切皆苦だと釈尊は喝破されたが、混濁の世であるからこそ、真理の灯は光り輝くのであり、諦めずにその灯を求めて道を修めれば、必ず涅槃寂靜という至福の境地に至れる、と結論づけておられるのである。

少林寺拳法は、拝みあい、援けあいの平和で豊かな社会を建設する為に、青少年の健全育成という人づくりを目的として、創始以来60年の星霜を仰ぎ踏んで来た。そして現在、全国各地でそれを祝い、改めて原点に帰ることを目的にいろいろイベントが開かれているが、こういう時に座間道院が開設30周年を迎えるのもうれしい縁起である。藤野祐彰道院長の一日も早いご回復と、座間道院がこれを機に、青少年の育成にますます力を発揮されることで社会に貢献されることを心からお祈りしたい。